

[研究論文]

音楽科における鑑賞の充実

— 自己の感じとったことを表現するための手立てを用いて —

Enhancement of Appreciation in Music learning

— Using the means to express one's own feelings and impressions —

田 中 亜 耶 佳

Ayaka TANAKA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
教職教育高度実践力プログラム

(2024 年 1 月 31 日受理)

高等学校音楽科鑑賞においては、「曲や演奏に対する評価やその根拠を考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くこと」が求められている。しかし、実際の教育現場では、曲を聴いた際に自己の感じたことに自信がなかったり、何も感じなかったりして、答えはないかと教科書を開く生徒たちが存在する。

そこで本研究では、鑑賞を充実させるために【音楽を形づくっている要素】に着目した。まず、要素を理解し、次に要素を聴きとる。最後にそれらに基づき、自己のイメージや感情などに関連付けて音楽を聴く。特に、自己の感じとったことを表現するために、ツールの作成を行った。ツールを用いることで、自己の感じたことを言葉で表現する支援や、新たな視点の獲得につながることを期待されることが捉えられた。

今後の課題としては、生徒が自由に選択できる場の設定を行うこと、鑑賞だけでなく、表現などの音楽全般で自己表現の充実を図る必要があることである。

キーワード：鑑賞、音楽を形づくっている要素、音楽の言語化、想像、創造、自己表現、対話

1 はじめに

今後の学習はどのようにあればいいのだろうか。それを考える上で、まず未来の教育のありようを示唆した「OECD Future of Education and Skills 2030」(和訳「OECD Education 2023 プロジェクトについて」秋田他)を参照する。本資料では、2030 年に向けた学習の枠組みの方向性を示している。そこでは、「私たちの社会を変革し、私たちの未来を作りあげていくためのコンピテンシー」として3つの力が挙げられている。その3つとは、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」である。その中でも本研究で着目するのは、「新たな価値を創造する力」である。なぜなら「新たな価値を創造する力」とは、従来の枠組みにとらわれず、新たな生活様式や、新たな社会モデルの開発が求められる 2030 年

に対し備える力と考えるからである。これは個人の思考や作業のみならず、他者との協力と協働により力がより発揮される。今後の学習を考えるにおいて、この力は全ての教科で意識して育てなければならない。

一方こうした OECD の「新たな価値を創造する力」の必要性の指摘に対し、現代社会はどのような問題を抱えているだろうか。そこで想起する必要があるのは、研究者フロム(1941)の言葉である。フロム(1941)は『自由からの逃走』の中で、「個人的な自己」を捨てることが社会に蔓延する問題となっていることを指摘し、「自己の喪失」を生じさせないためには、自己を表現することが必要であることを述べている。ここでの「自己」とは自分の考え・主張をもつことである。そしてフロムの言う「個人的な自己」を捨てることは、個々の特色あるものを活かすことなく、従来の社会モ

デルに安住して、「新たな価値を創造」することを阻むことである。これらは、創造性や新しい考えを生み出すために自己の考えをもつことが重要であることを指摘したものである。

上記のことは、ユネスコ「学習権宣言」(1985)にも記述されている。そこでは学習権について、「想像し、創造する権利」とであるとされる。ここから学習において、想像・創造することが求められていることが分かる。

以上から、今後の学習の向かう方向性としては、生徒一人一人が想像・創造し、自己表現できる学習の機会と、それをサポートする学習方法について充実させる必要がある。ゆえに教師のありようも教えることから学習をサポートすることへの転換が必要になる。それは教師が何を教えるかという発想から、手立ての工夫に意識を向けることでもある。

そうした状況下において、音楽科の学習はどのように進める必要があるだろうか。『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』p.46では、想像・創造や自己表現に関連した記述がある。そこには、音楽Iの鑑賞において育成する資質・能力について以下のように記載されている。「曲や演奏に対する評価やその根拠を考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くこと」。これは曲や演奏について、自己がどのように受け止めたかということの追究である。これを行うためには、【音楽を形づくっている要素】という根拠に基づいて考えることが必要であり、それを活用しながら、味わうことが求められる。

歌唱や演奏に対し鑑賞は一見受動的に見える。しかし実は、根拠に基づきその人の自己を通した感じ方であり、演奏や歌唱というスキルを持たなくても可能な自己表現であり、能動的な行為と考えるべきである。しかしながら、現実の学習場面では、曲を聴いた際に、どのように聴いたらいいか分からず、その結果として自己の感じたことに自信がなかったり、何も感じなかったりして、答えはないかと教科書を開く生徒たちが存在する。それは決して少数ではない。

これらの現実に対し、鑑賞を充実させるためには、次の3過程が必要だと考えた。まず【音楽を形づくっている要素】を生徒が理解する。次にそれを使って聴きとる。最後にそれらに基づき、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けて聴くことである。本研究では、こうした鑑賞を充実させることを目的とし、上記

の3つの過程、その中の特に3番目の《自己の感じとったことを表現するための手立てを工夫すること》を行う。具体的には鑑賞に着目し、創造性や自己表現の力を育む手助けとなるようなツールや授業案を作成、そしてその効果や課題を授業実践、生徒の記述から捉える。

なお本研究では、生徒に対する調査や実際を記載する。これらについては、実施前に目的と論文などへの投稿について説明し、許諾を得ている。

2 鑑賞について

(1) 鑑賞について

鑑賞とは、「芸術作品を理解し、味わうこと」である。^(注1) また、音楽科の鑑賞の学習については、「音楽によって喚起されたイメージや感情などを、言葉で言い表したり書き表したりして音楽を評価するなどの能動的な学習において成立する」と記述されている(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』p.47)。これらの学習の充実には、音楽Iの目標にあるように「音楽的な見方・考え方を働かせる」ことが必要になってくる。「音楽的な見方・考え方」とは、「感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働き の視点で捉え、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること」(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』p.22)である。この音楽的な見方・考え方は鑑賞においても重要な視点である。

これらから音楽科における鑑賞を捉え直すと、鑑賞とは、曲を聴き、自分なりに曲を感じ(想像)、曲について自分なりに評価し自己表現する(創造)ことである。これはつまり、生徒は自覚していないかもしれないが、【音楽を形づくっている要素】のいずれかが作用し、生徒の中に「曲に触発されて思い起こす風景や色などの経験を想起する」という想像が生じることである。そして想像したことを踏まえて、「曲について自己の感じたことを自己の言葉で表現する」という自己表現としての創造が生まれるということである。こうした個人の内部で生じたことは、その人にとって新たな価値の創造となる。この新たに生まれた価値は個人の中で閉じられたものとしてもつことも認められるべきであるが、その個の新たな価値の創造が、他者と関わり、比較・検討を経ることで、自己の特徴を知ることができたり、他者の聴き方を取り

入れ、自己の聴き方の幅を広げることができる。これは先の個人の内部での新たな価値の創造の共有によって生まれるもの、つまり他者との協力と協働によって生まれる新たな価値の創造である。

これらが本研究において考える音楽科における鑑賞の内実である。

(2) 高校生の鑑賞のとらえ方

こうした鑑賞について、高校生はどのように捉えているのだろうか。それについての調査を、2023年10月に教職大学院の「学校における実習」（以下実習と記述）で行なった。対象は、音楽Ⅱの選択者である高校3年生29名である。「音楽鑑賞とはどんな意味ですか」という問いに対して、「音楽を楽しむこと」や「心で感じること」などの自分なりに曲を感じる（想像）についての記述は多く見られた。しかし、自分なりに評価する（創造・自己表現）の記述については29名中3名であった。その具体は「自分の今の気持ちを確かめる」や、「音楽を聴いて言葉で表す」などの記述である。

この結果から、高校生は鑑賞について、曲を感じ、曲を理解するものとして捉えている人が多く、自己表現につながるものとして捉えている人は僅かであることが分かる。

先述した通り、鑑賞を充実させるためには、【音楽を形づくっている要素】を生徒が理解し、それを聴き取り、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けて聴くことが重要になってくる。そのため鑑賞には、【音楽を形づくっている要素】の知識と理解が必要であると言える。【音楽を形づくっている要素】については次項で述べる。

3 音楽を形づくっている要素について

(1) 音楽を形づくっている要素

【音楽を形づくっている要素】とは、音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成の8つの要素ことであり、音楽はこれらの要素によって形づくっている。また、これらの要素は総合的かつ複雑に関わり合いながら音楽としての全体を成しているとされる。【資料1参照】

(2) 鑑賞と音楽を形づくっている要素の関係

本項では鑑賞において【音楽を形づくっている要素】の学習が必要と考える理由を記述する。

鑑賞の学習について学習指導要領には、次のように説明されている。

・鑑賞は、「音楽によって喚起されたイメージ

や感情などを、言葉で言い表したり書き表したりして音楽を評価するなどの能動的な活動によって成立する」とされている（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』

p.47）。

・音楽活動の充実には、「音楽的な見方・考え方」＝「感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること」が必要である。

（同上書 p.21）。

こうした鑑賞で生じる思考の動きを具体化すると次のように考えられる。

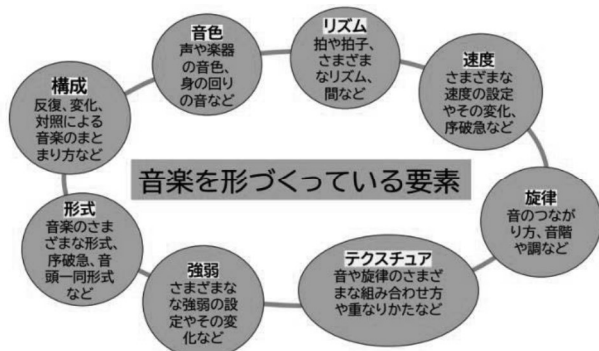
- ①「何か」を明確にはできないが、好悪もふくめ漠然とした感覚が浮かぶ。
- ②①で生じた感覚について「自己が感じたことが何によって引き起こされているか」ということを捉えようとする。
- ③知識やこれまでの経験を活用して、②を捉える。
- ④自己でそれを言語化など、自己表現して他者に伝える。
- ①で終わることなく、②の分析に向かう際、③の分析を実際に行う際の知識として必要となるものの一つが、【音楽を形づくっている要素】である^{（注2）}。これは自己の感覚に根拠を与えるものともなる。その後、捉えた根拠に基づき、次の⑤から⑦に挙げるような鑑賞の拡充が考えられる。
- ⑤一つの要素を聴き感じたことと、一つだけでなく、他の要素も聴くことによって感じたことの違いが生まれる。
- ⑥聴き取れるようになると、感じ方も変化する。
- ⑦曲によっての要素の意味の違いや、要素が引き起こす効果を考えることで、聴き方の幅が広がる。

さらにこれら個人に生じる鑑賞を他者と対話することがあれば、他者の鑑賞を取り入れた拡充にもつながるであろう。【音楽を形づくっている要素】を理解し、感じとすることは、音楽を聴いたときに①で終わらせることなく、自己の漠然とした感覚を確かなものとしたり、新たな聴き方や感じ方を可能にする。また、感じとったことの意図を探究することにもつながる可能性がある。

このように鑑賞は、【音楽を形づくっている要素】を学び、それを自己の漠然とした中に見出

すことによって自己の中で、あるいは相互の間で成立していく。その過程を感得することは、音楽の鑑賞そのものである。【音楽を形づくっている要素】を学ぶことは、鑑賞を確かに、そして豊かにすることに働くこととなり、鑑賞に対する価値を認識することにもなる。しかしそれだけではなく、鑑賞の過程で提示されたものを自己のもっているものを手がかりに分析したり、既成のものに捉われず、その中に何かあるかを考えたりすることでもある。このように考えると、鑑賞は「価値の創造」を促すことにつながると言えよう。

【資料1】音楽を形づくっている要素



(3) 要素の聴き取りの実際

①要素の聴き取りについての先行研究

それでは、生徒がどのように音楽を分析的に聴き取っているのかを探りたい。これについて原(2020)は、音楽鑑賞を対象とし、音楽の要素の把握の調査を実施している。対象は、必修選択である音楽Iの選択者53名、音楽IIの選択者48名を対象である。その調査によれば、【音楽を形づくっている要素】の「音色」と「旋律」の聴き取りが多く、着目されていないのが「速度」という結果が示されている。

この先行実践から、【音楽を形づくっている要素】の聴き取りに偏りがあることが指摘されている。これにより、生徒一人一人の音楽の聴き方・感じ方は異なり、気づく視点も生徒によって決まっていることが分かる。曲について、自己のもつ視点だけでなく、他の聴く視点を知ること、感じる幅も広がるのではないかな。そのため、聴き取れていない要素についても気づかせることが重要であると言える。曲の特徴に幅広く気づくことができるように、まず【音楽を形づくっている要素】について学習することが必要である。

②実態調査

原(2020)の先行研究を踏まえて、実習校の高

校生が、普段音楽を聴くときに着目している要素を探るために調査を行った。調査概要は、【資料2】の通りである。

【資料2】調査概要①

調査概要①	
調査目的	音楽を聴くときに、音楽のどの要素に着目しているかを探るため
対象	実習校、高校1年生40名
日時	2022年11月2日2限
調査項目	(1) 好きな曲を1曲教えてください。 (2) その曲の <u>推しポイント</u> (注3)を教えてください。その際に、【音楽を形づくっている要素】を用いて説明してください。

このように、好きな曲の理由について、【音楽を形づくっている要素】を用いて説明をする調査を行った。【音楽を形づくっている要素】については、8つの要素すべてを提示したが、要素ごとの説明は行わずに8つの要素名だけを並べた。要素ごとの説明を行わずに調査を行った理由は、授業を行う上で高校生の現状を知る必要があったためである。生徒の言葉から、普段音楽を聴く際にどの【音楽を形づくっている要素】に着目しているのかの分析を行った。【資料3】に生徒の調査結果の一部を示す。

【資料3】生徒の調査結果

	推しポイントの説明(着目した要素)
生徒1	芯のある歌声。(音色)
生徒2	同じフレーズを何度も繰り返しているので盛り上がります。(構成)
生徒3	失恋しそうなすれ違いが、多くなった恋人同士の苦しい気持ちが歌い方の強弱に表れていて、生きていてとても共感できる。
生徒4	イントロから桜の花びらが感じられ、リズムも心臓の鼓動のように聞かたにドキドキします。(リズム)
生徒5	サビのリズムに中毒性があって何回聴いても飽きないです。(リズム)
生徒6	音色が和風で落ち着いているから。(音色) 構成がサビの一部→1番→サビ→2番→サビ→1番のサビ

その結果、「リズム」25名、「速度」20名、「音色」13名、「強弱」12名、「旋律」3名、「形式」1名、「構成」1名という結果で、「テクスチャ」についての記述は見られなかった。

③要素の聴き取りの必要性

この結果から、一つの要素に着目して聴いている生徒がほとんどであり、聴きとる要素に偏りがあることが捉えられる。この生徒の聴き取りの偏りは、鑑賞にも影響を与える。こうした実態を踏まえると、生徒の現段階の音楽の聴き方の幅を広げることは、感じとる幅も広げることにつながるのではないかな。そう考えると、要素の聴き取りの学習をすることで音楽の聴き方を広げる必要があ

る。さらに、感じとる幅が広がることは、鑑賞したことを自己の言葉で表現する自己表現の充実にもつながる可能性がある。

そこで、感じとる幅を広げるために、【音楽を形づくっている要素】についての学習を行うことにした。実践授業は2回（実践授業①、②として記述）実施した。実践授業①と②の位置づけは、①で課題を捉え、②で改善・工夫をする。

4 実践授業①について

(1) 実践授業①の概要

実践授業①では、【音楽を形づくっている要素】の一つである、「テクスチュア」についての授業を行った。「テクスチュア」とは、音や旋律のさまざまな組み合わせ方や重なり方のことである。数ある要素の中から「テクスチュア」に焦点化した理由は、2点ある。1点目は、【資料2】の調査で分かった通り、「テクスチュア」に着目して音楽を聴いている生徒がいなかったため、学習を通して新しい聴き方の視点を全員がもてると考えたためである。2点目は、【資料2】の調査中に、「テクスチュアとは何か」というような発言があり、理解ができていない様子の生徒が複数人いたため、学習が必要だと感じたからである。「テクスチュア」についての授業の概要は【資料4】の通りである。

【資料4】授業概要①

授業概要①	
主眼	音や旋律のさまざまな組み合わせ方や重なり方などを聴き取り、その良さに気づくことが出来る。
対象	実習校、高校1年生40名
日時	2022年11月30日1限
授業展開	① 高校生になじみのある j-pop 曲の旋律のみと、伴奏付きの2つのパターンを聴き比べる。 ② モーツァルト《アイネクライネナハトムジーク第1楽章》を聴き、気づいたことの発言を行う。（感想、旋律の特徴、何パートあるかなど） ③ 2段階に分けて、1st ヴァイオリンと全体とで違いを聴き比べる。 ④ 最初に聴いたときとの違いがあるかを確認し、授業の振り返りをする。

(2) 授業展開

【資料4】の授業展開①から④について説明する。まず、①では旋律のみと伴奏付きの旋律の2つのパターンの音楽を聴き比べ、テクスチュアの分厚さの違いを聴きとる。ここでは、曲は旋律と他のパートがあるということを知り、「テクスチュア」

の重要性について理解する。次に②では、「テクスチュア」を聴きとる準備段階として、旋律の特徴や、どんな楽器が使われているかに着目して聴く。そして、③では①と同じように主旋律とそれ以外のパートの重なりや組み合わせを聴きとるために、主旋律を担当する1st ヴァイオリンのみと全体（1st ヴァイオリン、2nd ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ）の2つのパターンを聴き比べる。ここでは、①最初から10小節間と、②11小節から第2主題に入るまでの①と②の2段階に分けてテクスチュアを聴きとる。①では、最初の4小節間はユニゾンで、5小節目からは1st ヴァイオリンがメロディーとその他が伴奏でトゥッティ部分である。ユニゾン部分とトゥッティ部分のテクスチュアの分厚さの違いの聴き取りを行う。②では、1st ヴァイオリンと2nd ヴァイオリン、ヴィオラとチェロの掛け合いに着目して旋律の組み合わせを聴きとる。最後に④では、最初に音楽を聴いたときと、テクスチュアの学習を経て聴いたときとの聴き方の違いに着目する。

(3) 実践授業①の成果と課題

授業展開④で行った授業の振り返りから、テクスチュアを聴き取れていると分かる記述があった。「最初は静かな感じがするけど、どんどんいろんな音が重なって華やかな感じがする。」や「ヴァイオリンが演奏している間、他の楽器は一定のリズムを刻んでいる。」という記述がある。これらからは音の重なりや、音の組み合わせについて着目して聴けており、テクスチュアを理解できていると言える。ここから、【音楽を形づくっている要素】の学習をすることで、音楽の聴く幅が広がることが分かる。よって、【音楽を形づくっている要素】について丁寧に学習することは、感じる力を育てることができ、その感じた特徴を自分なりにもつことができるようになると言える。

一方で、「強弱がある。」や「音の強弱が激しくなっている。」などのテクスチュアとは関係のない記述をしている生徒もいた。以上の結果と、授業中の生徒の様子から、筆者が行った授業では、生徒全員がテクスチュアを聴き取れるようになることは難しいことが捉えられた。聴き取れなかった原因としては、聴きとる部分が長かったためどこを聴けばよいか分らなかったことなどが挙げられる。音楽をかける前に着目するポイントを伝えたり、聴く部分を短くして繰り返し聴いたりする必要があった。

この課題を生かし、テクスチュアに限らず、【音楽を形づくっている要素】の聴き取りを広げるた

めの手助けとなるようなツールの作成を行うことにした。このツールを用いた授業を実践授業②として次項に示す。

5 実践授業②について

(1) 事前調査

実践授業①の対象は高校1年生であったが、対象が高校3年生に変わったため、【資料2】のように音楽を聴く際にどの要素に着目して聴いているのかの再調査を行った。再調査の概要は【資料5】に示す。前回の調査【資料2】では、好きな曲の推しポイントから要素の着目ポイントを分析した。しかし、推しポイントの一つとして要素でなく作曲家や歌詞が好きだからという声が多かったため、2回目の調査では、歌詞のない曲に統一して要素の着目ポイントを分析することにした。

【資料5】調査概要②

調査概要②	
調査目的	音楽を聴くときに、音楽のどの要素に着目しているかを探るため
対象	実習校、高校3年生 29名
日時	2023年6月13日 5限
調査項目	(1) 曲を聴いて、気づいたこと、感じたこと、好きだったところなどを教えてください。 (2) どんな音楽をよく聴きますか。(選択肢あり) (3) どんなときに音楽を聴きますか。生活の中で音楽をどう使っていますか。(選択肢あり) (4) 音楽を聴くときに一番着目することを教えてください。 (5) 音楽鑑賞とはどんな意味だと思いますか。

着目した要素については、「速度」が16名、「強弱」が13名、「リズム」が7名、「音色」が3名、「旋律」が1名、「テクスチュア」と「形式」と「構成」については0名という結果であった。【資料2】の実態調査と同じように、聴きとる要素は人それぞれであった。

実践授業①では、【音楽を形づくっている要素】の学習を行うことで、音楽の聴く幅が広がることが捉えられた。実践授業①では、聴き取りのなかった「テクスチュア」についての学習を行ったが、今回は一人一人の担当の要素を決め、音楽の聴き取りの幅をさらに広げることにする。担当の要素の決め方や授業概要については後に示す。

(2) 実践授業②の概要

実践授業②の概要は、【資料6】の通りである。

(3) 実践授業②における工夫

①語彙ブックの作成

語彙ブックは、音楽を聴く際に手助けとなるツールとして作成した。具体的には、音楽のどこを聴けばよいか分からない生徒に対して、聴くポイントの焦点化が可能になるものである。語彙ブックは、音楽の印象を表す言葉と【音楽を形づくっている要素】ごとに特徴をまとめたものの二つで成り立っている。語彙ブックについては、紙面の都合上巻末に示す。【資料7】参照。

音楽の印象を表す言葉については、曲を聴いた際に第一に何を感じたのかを表現する言葉を書いている。例えば、「自然の中にいるよう」や「引き締まっている様子」などの言葉である。音楽の印象を言葉で表すことは、後に行う曲の分析でも生かされることである。

【音楽を形づくっている要素】ごとの特徴をまとめたものについては、形式と構成を除く6つの要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱）の特徴をまとめた。形式と構成は、曲を聴くことのみでは理解しにくい。そのため、まずは他の6つの要素について理解する必要があると考えて除いた。6つの要素の特徴については「イメージ」と「質感・特徴」の2段階でまとめている。これは要素を捉える際に、まず音の「イメージ」をもち、次に「質感・特徴」を捉え、なぜその「イメージ」をもったのかを「特徴」をもとに分析する必要があると考えたためである。例えば強弱であれば、だんだん自分に迫ってきているように感じた（イメージ）とするなら、音がだんだん強くなっていた（特徴）と結び付けることで曲中の要素の工夫の意味が理解できるのではないだろうか。また、要素の音色のみ「特徴」ではなく、「質感」と記した。これは音色は「特徴」よりも、音の質である「質感」の表記の方がふさわしいと考えたためである。

また、語彙ブックには言葉が追加できる余白を作っている。感じたことを共有する中で、自己になかった表現方法などを余白に追加することで、聴きとる視点や、感じる視点も増えることを期待した。

さらに、要素の聴き取りが比較的難しいと考えられる「テクスチュア」と「音色」については、次のように、要素を聴くためのポイントを作成した。

「テクスチュア」…音がたくさんあるところほど

んな感じがしますか？テクスチャの役割は何だと思いませんか？

「音色」…楽譜の“たま”の部分をつんで、音の流れを見てください。

これらは、【資料 6】授業展開④の班の活動の際に、生徒に簡単に配れるよう付箋に記入した。

【資料 6】授業展開④では、語彙ブックの名前付けを行った。名前から、語彙ブックを「自分の中の視点を増やす」や「自分の感情や感覚を表す」と捉えている生徒がいることが分かった。これらから、語彙ブックを用いることで、自己の感じたことを言葉で表現する手助けになったり、新たな視点の獲得に繋がったりするのではないかと推察される。

【資料 6】実践概要②

授業概要②	
主眼	様々な音楽の聴き方をし、感じたことを他者と交流し、自分の音楽の聴き方を見つめたり、広げたりすることができる。
対象	実習校、高校3年生 29名
日時	2023年10月24日 5,6限
授業展開	① バッハ《無伴奏ヴァイオリンソナタ》を聴き、曲の印象と、音色に着目する。 ② 作曲家や、ソナタ形式、使用楽器について理解する。音楽を形づくっている要素について、特にテクスチャと、音色と旋律の違いを理解する。 ③ 個人で担当の要素について聴き取る。 ④ 全体で交流する。語彙ブックに名前を付ける。

②教材の作成

【資料 6】授業展開①では、どのような曲かを捉えるために、曲の音色に着目して聴く。その際に、耳を使って聴く（聴覚）だけでなく、布の触り心地の質感（触覚）で音色を捉える。ここで、音色に着目した理由は2点ある。1点目は、音の三要素（音の高さ、大きさ、音色）から、音楽において音色の重要性が分かるからである。2点目は、【資料 5】の調査概要②では、音色の記述は29名中3名であり、音色を聴きとる生徒が少ないためである。布を用いる理由については、聴覚だけでなく、触覚を使用することで音色の質感を捉えやすくできると考えたためである。

実際に使用した布は9種類で、これらの布を1枚の画用紙に貼りつけた。【資料 8 参照】布の種類は、ポリエステル、フェルト、麻、牛革、レース、ニット、ベロア、綿、ガーゼである。

生徒の感想には、「布を使って、音楽を聴くことでイメージがしやすくなった。色々な感じ方があ

って、新たな発見ができた」というものもあった。これらから、布を用いることで新たな自己を発見し、自己表現するための手助けになるということが言えるのではないか。

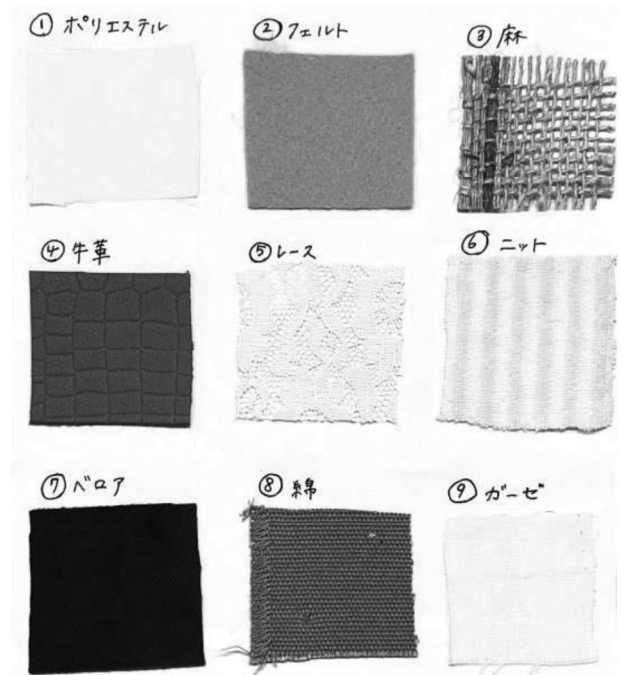
③担当の要素について

事前調査【資料 5】調査項目(1)(4)に着目し、担当の要素を決めた。担当の要素の決め方について2人の生徒を例に説明する。調査項目(1)曲についての印象で、生徒 A「曲のテンポが速くなったり、遅くなったりして曲にひきこまれた」は、生徒 Oは「曲のスピードと移り変わり」と記述しており2人とも速度に着目して聴いているのが分かる。

【資料 9】参照。調査項目(4)音楽を聴くときに着目することでは、生徒 Aは歌詞であったため、調査の際に聴き取りがなく、さらに普段からも聴き取りがないリズムを担当の要素に決めた。このように聴き取りのない要素を担当にした生徒がほとんどであるが、聴き取りが可能になりそうな生徒を担当の要素にあえてするようにした。例えば、生徒 Oは重低音と記述しており、普段から音の重なりに着目して聴いていることが分かる。そのため、テクスチャを担当の要素にした。

【資料 6】授業展開③では、要素ごとのグループで感じたことの共有を行った。各グループは4から5名で構成した。各グループに要素を聴くことができそうな生徒を一人配置するようにした。そうすることで、グループ活動での意見交流が深まるのではないかと考えた。

【資料 8】布の教材



【資料 9】担当の要素

番号	1) 曲を聴いての印象	4) 音楽に聴くときに着目すること	担当の要素
生徒A'	曲のテンポが速くなったり、遅くなったりして曲にひきこまれた。 (速度)	歌詞	リズム
生徒O	曲のスピードの移り変わり。 (速度)	メロディーよりベースなどの重低音	テクスチャ

(4) 実践授業②の成果と課題

①成果

成果として、語彙ブックと布の教材が、生徒の自己表現の手助けや、新たな自己の発見につながることが分かった。

まず語彙ブックである。上記にもあるように、語彙ブックについては、「自分の中の視点を増やす」や「自分の感情や感覚を表す」ものとして捉えている生徒がいた。語彙ブックを使うことで、自分になかった視点で音楽を聴くことや、今まで言葉での表現が難しかった感情や感覚を表現できることが可能になると言える。

次に布の教材である。「布を使って、音楽を聴くことでイメージがしやすくなった。色々な感じ方があって、新たな発見ができた」と生徒の記述があった。音楽を聴覚だけでなく、触覚を使用し聴くことで、音楽に対してのイメージが膨らむことが期待される。さらに、触覚などの様々な聴き方をするすることで、新たな自己についての発見にもつながるのではないかな。

このように語彙ブックと布の教材は、生徒の鑑賞の支援となっていることが捉えられた。

②課題

課題は、授業内容、選曲、教材の3点である。

1点目は授業内容が盛りだくさんであったことである。今回は、6つの要素を取り扱ったため、全体での共有(【資料 6】授業展開④)時間が長くなった。6つの要素を1回の授業で行うのではなく、2つか3つの要素に絞ると時間にも余裕ができ、さらに、音楽を更に深く聴くことができるのではないかな。

2点目は、授業で取り扱う選曲についてである。今回は、バッハの《無伴奏ヴァイオリンソナタ》を取り扱った。理由は、使われている楽器がヴァイオリンのみであり、比較的要素の中では聴き取りにくいと考えるテクスチャが聴き取りやすいと考えたからである。しかし、授業中の生徒の様子を見ると、拍子がとりにくく、要素の一つであるリズムを捉えるのが難しそうであった。また、生徒のほとんどが初めて聴いた曲であったため、生徒の聴きなじみのある曲を選ぶ必要があった。

そうすることで、要素の聴き取りにさらに意欲が高まった可能性がある。

3点目は、布の教材についてである。今回は【資料 6】授業展開①の音色の聴き取りの際に布を使用した。音楽を聴きながら布に触らせたため、音楽を聴く間に布の触り心地を確かめることと、音色がどの布にあうかということの2つの動作をする必要があった。そのため生徒の中には、布を選ぶのが難しいと感じている生徒がいた。これを改善するためには、音楽を聴く前に、布の質感に触って確かめる時間を設定する必要があった。

成果と課題

本研究の成果は、次の2点である。1点目は、【音楽を形づくっている要素】の学習を丁寧に行うことで、聴き取りの視点を増やすことが期待されることである。2点目は、語彙ブックや布の教材を用いることで、自己の感じたことを言葉で表現する支援や、新たな視点の獲得につながることが期待されることである。これらの成果から、語彙ブックと布の教材という2つの手立てを用いることは、感じとることを支援し、さらに感じとったことを自己表現することが可能になると期待される。また、これらの2つの手立ては、校種や学年の違いによって記載する表現や、情報量が異なってくると言える。

本研究の課題は、次の3点である。1点目は、単発の授業でなく、年間で継続して行う必要があることである。2点目は、生徒一人一人の聴きとる要素は、事前調査をもとに教師側で決めたが、生徒が自由に選択できる場の設定を行う必要があることである。3点目は、鑑賞だけでなく、表現などの音楽全般で自己表現の充実を図る必要があることである。これらの課題から、自己表現を可能にするためには、2つの手立てを授業毎で使い、様々な聴き方を行うことと、感じとったことを言葉で表現することの積み重ねが必要であると言える。さらに、生徒間でなく、教師や保護者などとこれらを共有することで、さらに自己表現の幅も広がるのではないかな。

おわりに

本研究では、音楽科における鑑賞において、生徒の自己の感じとったことを表現することの支援を目指し、授業案やツールを探究した。

本研究では【音楽を形づくっている要素】に着

目したが、高校生のほとんどがこの言葉を知らず、理解していない現状があった。しかし、実践授業を通して、【音楽を形づくっている要素】を丁寧に学習し、聴きとることは、生徒の音楽を聴く幅の視点を広げることが期待されると分かった。さらに、語彙ブックや布の教材を活用することで、自分になかった視点で音楽を聴くことや、今まで言葉での表現が難しかった感情や感覚を表現できること、新たな自己の獲得にもつながることが分かった。

また、授業案やツールの作成・改善・実践を繰り返すことで、やはり1番大切なのは生徒一人一人の実態を見ることだと実感した。授業実践は①②と行い、特に②では生徒一人一人の実態を見て要素の担当を決めたりした。生徒は、自分の実態に合った担当の要素があることで、とても嬉しそうであった。こうした「担当」を設定することは、生徒の授業へのモチベーション向上にもつながるのではないかな。今後、生徒一人一人に向き合い寄り添えるように精進したい。そして、音楽科の授業を通して、子どもたちが自己表現がしやすくなるような環境や授業づくりについて模索していきたい。

最後に本研究にご協力してくださった、先生方と子どもたちに心からの感謝を申し上げる。

注

(注1) 本研究では鑑賞をどのように考えるかについて、同じ芸術科目である書道科と共有しながら追究することとした。「芸術科書道における鑑賞についてー『鑑賞の手引き』を用いて」後藤眞彩(2024)にも記載。後藤は、共有した内容を踏まえ、書道の鑑賞について追究している。

(注2) 音楽を形づくっている要素以外に、作曲者やその曲の社会的背景なども知識の一つとなるのではないかな。

(注3) 高校生が身近なものとして活動できるように推しポイントと用いた。

主な引用・参考文献

- OECD「OECD Future of Education and Skills2030」和訳「OECD Education 2023 プロジェクトについて」秋田他 p.6
E・フロム(1977)『自由からの逃走』pp.203-204
(日高六郎訳東京創元社 72 版)
ユネスコ「学習権宣言」1985 年 3 月 29 日 第 4 回ユネスコ国際成人教育会議(パリ)
文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成 30

年告示)解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 音楽編 美術編』p.46、47、22、21 教育図書株式会社

原 大介(2020)「高校生は音楽鑑賞で何を聴き取っているのだろうか?ー音楽を形づくっている要素の聴衆に関する若干の考察」pp.83-92 お茶の水女子大学付属高等学校研究紀要

【資料 7】語彙ブック

②

のための語彙ブック

3 年 () 組 () 番

名前 ()

○音楽の印象を表す言葉

- | | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|-----------|--------|-----------|
| ・場面が感じられる | ・せかされる | ・温度差がある | ・あたたかい | ・疾走感 | ・焦燥感 |
| ・しなやか | ・不気味 | ・壮大 | ・引き込まれる | ・ゴージャス | ・切ない |
| ・華やか | ・ずっしりと重たい | ・自然のなかにいるよう | ・引き締まっている | ・ゆるい感じ | ・もがいている感じ |
| ・叫んでいる感じ | ・宮殿みたい | ・光が差し込んでいる | ・ドラマティック | ・深みがある | ・絶望 |
| ・物足りない | ・濃密 | ・角ばっている | ・川の流れのよう | ・ | |

○音楽を形づくっている要素

音色

① イメージ

- ・豊かな
- ・光がさしているような
- ・寂しいような
- ・暗い、明るい
- ・濁ったような
- ・貧弱な
- ・霧がかかったような
- ・遠き通っている
- ・目の前が曇っているよう

② 質感

- ・しなやか
- ・やわらかい
- ・角ばっている
- ・冷たい
- ・なめらか
- ・かたい
- ・チクチクする
- ・のどが渇く、パサつく
- ・明るい、暗い

強弱

① イメージ

- ・近くの人に秘密を話すように
- ・叫ぶような感じ
- ・遠くの人に呼びかけるように
- ・壮大な
- ・波の満ち引きのような感じ

② 特徴

- ・だんだん強く（弱く）
- ・急激に強く（弱く）
- ・ところどころ強く（弱く）
- ・常に強く（弱く）

旋律

① イメージ

- ・なめらかにつながっている
- ・一本の線みだいに
- ・ジグザグしている

② 特徴

- ・上行形（だんだん音が高くなっている）
- ・下行形（だんだん音が低くなっている）
- ・急に音が高くなっている
- ・音階のように進んでいる

リズム

① イメージ

- ・かるやか
- ・小さいものが転がるような
- ・流れるような
- ・間が感じられる
- ・何かが動いている感じ

② 特徴

- ・細かい
- ・一定
- ・複雑
- ・休憩がある
- ・ゆったり

テクスチャ

① イメージ

- ・分厚い
- ・薄い
- ・重厚
- ・濃密

② 特徴

- ・重音（音の重なり）がある
- ・単音のみ

速度

① イメージ

- ・焦燥感
- ・疾走感
- ・せかされる
- ・落ち着きがある
- ・のんびりとした
- ・足元を見ながら歩くように

② 特徴

- ・速い
- ・遅い
- ・だんだん速く
- ・だんだん遅く
- ・常に一定
- ・ほとんど変わらない
- ・緩急がある